

# 『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(八)

植 木 久 行

●一九三番 李嘉祐？「青泥店を發して長安(擧の誤り)縣に至り、西のかた江を渡る」「千峯鳥路含梅雨、五月蟬聲送麥秋」

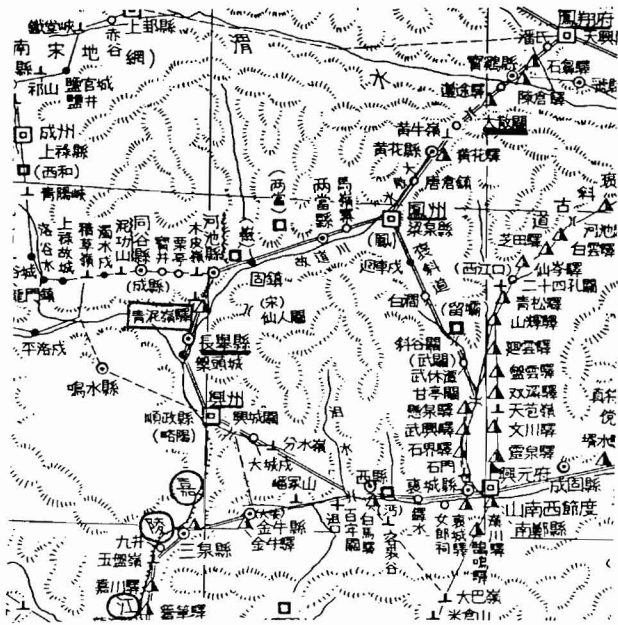
○本詩は『全唐詩逸』卷上に收める逸句であり、『和漢朗詠集和談鈔(詩注)』によれば、「夏ノ興ヲ賦スル詩ノ腰句(七律の頸聯)である。詩題は、しばらく前田侯爵家所藏二條爲氏筆本に據る(『校異和漢朗詠集』)が、『全唐詩逸』には「發青泥店至長余縣西涯山口」、『私注』には「發青滋店至長安縣而西渡江作」、『六注』には「發青滋店至長安西度江之作」『貞和本 和漢朗詠集』には「發青泥店至長縣西渡口」に作っており、大きな文字の異同が存在する。嚴耕望『唐代交通圖考』第三卷(七七六頁前後)には、この詩題に對して、次のごとくいう(要約)、

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

青泥店とは、都長安の周邊から漢中(陝西省西南部)や蜀(四川省)へと向かう秦嶺山脈越えの主要な驛道のなかで西端に位置する「故道」『通典』卷一七六に記す梁秦驛道(青泥道)、すなわち都長安—鳳翔府—大散關—鳳州梁泉縣—同河池縣—青泥嶺—青泥驛—興州長舉縣—同順政縣と續く途中、青泥嶺(河池縣と長舉縣の境界をなす秦嶺山脈中の一峰)に置かれた青泥驛の邸店を指す。詩題中の「長余縣」(『全唐詩逸』)は、青泥嶺の東南五十三里にある興州長舉縣の音譌(余と舉は疊韻—引用者注)である。

この説は、きわめて注目に値する(地圖参照)。興州長舉縣の南十里には、長江水系の一つ、嘉陵江が南流する。従って前掲の詩題は、作者が關中から蜀へと赴く途中、険しい山越えをよりやく終えて、嘉陵江を渡ろうとする情景を表わすこ

『唐代交通圖考』第四卷圖十四



とになる。つまり、長安縣は長舉縣の誤り、江は嘉陵江を指す、と考えてよい。

青泥嶺（甘肅省徽縣の南、陝西省略陽縣の西北）越えの驛道

は、蜀道北段の諸驛道のうち、三百里以上も遠まわりではあったが、關中・漢中南平原の平坦な五百餘里の大道を含み、しかも嘉陵江とその支流の谷道部分は、一部を除けば、比較的ひらけ、村や町が点在して住民も多かった。それで物資の供給と安全保障の両面ですぐれており、杜甫も乾元二年（七五九）、四八歳のとき、秦州から蜀の成都へと赴く際、途中からこのルートに入っている。『元和郡縣圖志』卷二一、山南道興州長舉縣、青泥嶺の條には、「懸崖萬仞、山には雲雨多く、行く者屢々泥淖（淖も泥、ぬかるみ）に逢ふ。故に青泥嶺と號ぶ」と記す。青泥とは淤泥（たまった泥）、青い泥、べとつく泥などの意。李白の著名な「蜀道難」詩に、「青泥何ぞ盤盤（屈曲のさま）たる、百歩に九折して巖巒を縈る」と歌われるところである。本詩の「西のかた江を渡る」地點は、杜甫が入蜀の際に渡った嘉陵江の舟の渡し場「白沙渡」か、それとも乾渠渡か。

○「青泥店」 店は旅宿業・食飲業・倉庫業等を兼ね備えた商用屋舎を指し、邸・邸店ともいう。店と邸は、基本的には同義であるが、邸は必ず大都市にある宏壯な建物を指し、店は一般に鄉村や小都市に置かれた小規模なものをいう。この青泥店は、いわゆる驛店的一種。驛の名稱をそのまま用い

ながら、驛の字を省略した呼稱。つまり、青泥驛の驛舎の周  
邊に造られた(通常複數の)店中の一營業店を指す。

○「作者考」本詩の作成年代は、傅璇琮「李嘉祐考」や儲  
仲君「李嘉祐詩疑年」などを参照しても、全く未詳である。  
ところできわめて興味深いのは、本詩の作者を李嘉祐の從姪  
にあたる李端とするテキスト(前田侯爵家所藏傅寂然法師筆本)  
が存在することである。『唐才子傳校箋』卷四、李端の條(傅  
璇琮執筆)によれば、李端はかつて東川(劍南東川節度使)の  
幕府に入っており(時期は不明)、「泥坂望青城(蜀の岷山の第一  
峰青城山)、浮雲與棧平」の句で始まる盧綸「送李校書赴東川  
幕」詩の李校書とは、大曆五年(七七〇)の進士科及第後、祕  
書省校書郎となつた李端を指している。盧綸の詩は、おそら  
く都長安付近で東川の梓州(四川省三臺縣)に赴く李端を見送  
つた作であり、それで青泥嶺(泥坂)や蜀の高峻な棧道を詠み  
こんだわけであろう。とすれば、「青泥店を發し…」の本詩  
は、じつは李端の作であり、彼が劍南東川節度使の幕府に赴  
任する途中の作ではないか、と臆測されてくる。李嘉祐作者  
説に一抹の不安が生じるゆえんである。

○「千峯」「多ノミネ・連峰ノ意」(『抄注』)。峯・峰は異  
體字。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

○「鳥路」「ヤマヂ」(伊藤東涯『名物六帖』地理箋上)。わづ  
かに鳥だけが通過できる、人跡未踏の高峻な山の峰や尾根、  
あるいはまた、細く険しい山道を誇張した言葉で、「鳥道」  
「鳥徑」と同意。川口文庫本に「鳥の通り路すじ。翼あるも  
のだけが到りえる空の通い路」とするのは、少くとも本詩の  
場合は妥當ではない。王維の「送楊長史赴果州(四川省)」詩  
に「鳥道一千里、猿啼十二時」とあり、『増註三體詩』卷三、  
天隱注に引く『南中八志』に「鳥道四百里、其の險絶なるを  
以て、獸すら猶ほ踐無し。特だ上に飛鳥の道有るのみ」とあ  
る。また前掲の李白「蜀道難」詩にも「西當太白(山の名)  
有鳥道」とあり、清の王琦は、「連山高峻にして、其の少し  
く低く缺けたる處、惟だ飛鳥のみ此を過ぎて以て徑路と爲  
し、總て人跡の至る能はざる所なるを見ずなり」と注する  
(卷三)。

鳥道・鳥路の語はまた、險峻な蜀道を形容する際に多用さ  
れる傾向をもつ。前掲の王維・李白の詩以外にも、北周の庾  
信「秦州天水郡麥積崖佛龕銘」序の「鳥道乍窮、羊腸或斷」、  
杜甫「秋興八首」其七(夔州での作)の「關塞極天惟鳥道、江  
湖滿地一漁翁」、白居易「送友人上峽赴東川辟命」(卷17)の  
「難於尋鳥路、險過上龍門」、劉禹錫「松滋渡望峽中」詩の「巴

人淚應猿聲落、蜀客船從鳥道回」などは、いずれも同例と見なせよう。初唐の張文成『遊仙窟』中の、「此れは是れ神仙の窟なり。人の跡は及でくこと罕にして、鳥の路(道?)のみそ纔かに通ふたる」(江戸初期(前期)無刊記本の訓に従う)も同じである。かくて明の璩崑玉は、『古今類書纂要』卷二、地理部の條に、鳥路を「蜀に鳥道有り、言ふところは路狹窄にして、鳥行を通すべきのみ」と解釋する。こうした「鳥路」のイメージは、詩題中の青泥店や長舉縣とも充分照應する。嚴耕望『唐代交通圖考』第三卷(七七八頁)にいう、「河池(縣)より青泥嶺を経て長舉(縣)に至る八十里の間は、山嶺崎嶇(險しいさま)として、棧閣は蓋し多く四千餘間(柱と柱の間を數える單位)に至りて、殆んど此の道中の最も險しき一段爲るか」と。

○〔合梅雨〕 梅雨は、いわゆる五月雨。三國吳の周處撰『風土記』に、「梅熟する時の雨」(『初學記』卷三、夏所引)とあり、「梅雨 細かなること絲の如し」など詠まれる。「合」は下句の「送」字とともに擬人的表現。「千峯鳥路合梅雨」の解釋については、從來「ヨモノヤマノミネニ、ナツノアメノフル意也」(『抄注』)、「四方の峰に雲うち靡き重りて、五月の雨を催す様なり」(『集註』)の方向にあり、「見渡すかぎり

の數知れぬ峰々には梅雨を含んだ雲がたれこめて鳥の路をはばみ」(川口譯)、「峰々の山上の道は梅雨を含んだ雲が一面にたれこめ」(大曾根譯)などと譯されてきた。「合」字には、確かに「籠罩、迷漫」(一面にたちこめ漂う)の引申義もあり、これらの解釋はいちおう成立しそうである。しかし合は、本來「ロニ物ヲクムコト」(『操觚字訣』卷五)、従つて「合雨」の基本義は、雨水を含みもつ(たたえる)、雨水が對象物の中にまでしみこむ意である。たとえば、王維「田園樂七首」其六「桃紅復含宿雨、柳綠更帶春煙」や、杜牧「柳長句」の「巫娥廟裏低含雨、宋玉宅前斜帶風」などの用例は、それぞれの表面ばかりでなく、その内部への浸透を思わせるほどの、たっぷりしたぬれそぼりかたをいう。それで柳の枝の場合は、重さにたえかねて「低れる」わけであらう。つまり本句の場合も、そそりたつ峰々の険しい山道が、梅雨どきの降りやまぬ雨水をたっぷり吸いこみ、一面にぬかるんで歩きにくい情景、いいえれば、自ら通りゆく青泥嶺の名にし負う「泥淖」状態を詠み、旅路の難儀を示唆した表現ではなからうか。從來の解釋は、青泥店の位置とその名稱「青泥」の由來が未詳であったため、適譯に到りえなかつたわけであらう。要するに本句は、「險峻泥濘的青泥嶺」(李之勤ほか『蜀道話古』

二七頁)の特色を巧みに詠みこんだ詩句、と評しえよう。

○「五月蟬聲」 『禮記』月令篇等のほかに、『詩經』豳風「七月」にも、「五月 鳴く蟬あり」とある。

○「麥秋」 「四月ヲ云フ」(六注)が、黄金色に熟した麥畑の美しいイメージをとまなう言葉である。白詩(『觀刈麥』卷1)に「小麥 隴を覆ひて黄なり」と歌う。後漢の蔡邕『月令章句』(『初學記』卷三、夏所引)に、「百穀は各々初めて生ずるを以て春と爲し、熟するを秋と爲す。故に麥は孟夏(四月)を以て秋と爲す」と説明する。『初學記』卷三、夏、「事對」に「麥秋 梅雨」とあるように、この二語はしばしば對になる。たとえば本例以外にも、盛唐の崔翹「鄭郎中山亭」詩の「杜鰾熏梅雨、荷香送麥秋」、中唐の朱慶餘「鏡湖西島言事」詩の「偶因藥酒欺梅雨、卻著寒衣過麥秋」、戴叔倫「酬袁太祝長卿小湖村山居書懷見寄」詩の「麥秋桑葉大、梅雨稻田新」などがある。特に第一例は、本詩と同じく「麥秋を送る」と歌う。このほか、隋の煬帝「江都夏」詩の「黄梅<sup>一作黃</sup>雨細麥秋輕」、唐の玄宗「端午三殿宴群臣探得神字」詩の序「喜麥秋之有登、玩梅夏之無事」、晚唐の羅隱「寄進士盧休」詩の「麥秋梅雨遍江東」なども、ほぼ類似した用例である。ちなみに、唐の元和七年(八一二)ごろに成る鄭餘慶撰『大唐

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

新定吉凶書儀<sup>(26)</sup>年敍凡例第一に、

四月孟夏敍云、首夏・夏首・初夏・早夏・麥秋・麥夏。  
 …… 五月仲夏敍云、中夏・仲夏・盛夏・炎夏・梅夏・梅暑・梅潤。時云、毒熱・梅熱・盛熱・濕熱。  
 という。

●一九四番 許渾「咸陽城の東樓」「鳥下綠蕪秦苑寂、蟬鳴黃葉漢宮秋」

○詩題は、南宋の蜀刻本『許用晦文集』卷一、景宋鈔本『丁卯集』(四部叢刊)卷上、前蜀の韋穀『才調集』卷七などに據る。南宋の岳珂撰『寶眞齋法書贊』卷六「唐許渾鳥絲欄詩真蹟」の條には「咸陽西門城樓晚眺」、『文苑英華』卷三三三には「咸陽城西樓晚眺」に作る。他方、『私注』には「題咸陽東樓賦咸陽城」、『千載佳句』四時部・早秋や『六注』には「題咸陽城東樓」、前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本には「咸陽宮城東樓」に作る。

ところで、『私注』等の「題」字は、驛舍旅館・樓臺亭閣・僧寺道觀等の牆壁・屏風・門扉・廊柱・詩板や、名勝地の石壁、あるいはまた、竹木や葉などに詩歌(原則として自作のそれ)や姓名等を題きつける意。いわゆる題壁詩の風習は唐

代、一種の作品發表方式、詩歌流布の主要な手段として定着・盛行し、寒山詩を除いても、約四百首が現存する。この意味で「題」字は注目に値する異文であるが、『私注』の「賦咸陽城」の四字は、おそらくテーマの解説部分が混入したものであろう。ただし本詩のテーマは、より廣範に、華やかな秦漢文明の滅亡に對する懷古であらう。許渾の代表作として名高い登樓懷古詩の一節である。

○〔咸陽城〕 唐代の京兆府咸陽縣の縣城を指す。秦の都咸陽は、陝西省咸陽市の東北約十五キロの窯店（ようてん）一帶にあつたが、唐の咸陽縣城は「杜郵」（とゆう）（秦の都咸陽の西の杜郵亭一帶〔今の咸陽市の東北二・五キロの渭城區〕）に置かれていた（29）〔舊唐書〕卷38地理志。つまり、その位置は同じではなく、秦の咸陽城址は唐の咸陽縣城の東北十二、三キロに位置していた。ちなみに、秦の都咸陽は始皇帝の時代、人口約五〇萬を擁し、渭北の咸陽宮地區のほか、その北部にあたる北阪（六國宮）地區と、渭南（渭水の南岸）地區の二つを含む巨大な都城に成長した。詳しくは王學理『秦都咸陽』（30）、松浦・植木『長安・洛陽物語』（31）二五頁以下など参照。

○〔東樓〕 詩題の異文「西門の城樓」を参照すれば、この東樓は咸陽縣城の東門上に建つ高樓であらう。北宋の宋敏

求『長安志』卷十三、咸陽縣の條によれば、「城の崇さは一丈五尺」（約四・七メートル）という。その上に建つ東樓から東北に秦の咸陽城址、東南に漢の長安城址を遠望して古えをしのんだわけである。晩唐の韋莊にも「登咸陽縣樓望雨」詩がある。

○本詩の作成年代は未詳であるが、許渾が大中年（八五〇）三月、潤州城（江蘇省鎮江市）南の丁卯澗村舎で手寫した自撰作品集の一部〔唐許渾烏絲欄詩真跡〕に收められているところから、それ以前の作であることは確かである（許渾「烏絲欄詩自序」）。なお本詩全體の解釋については、松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』に收める筆者の譯注を参照されたい。

○〔鳥下〕 『抄注』に「人ナクシテ、シツカナル故ニ、トリ、ニハノクサニオリテ、アソフナリ」とある。

○〔綠蕪〕 青々と繁茂する雜草、群がり生える綠草。白川靜著「字統」（32）は、蕪を「形聲、聲符は無。無に豐盛の意があり、蕪とは草の繁茂することをいう。『説文』一下に「蕪るるなり」とあって、蕪穢（ぶい）をいう。荒蕪して、雜草の茂るにまかせた狀をいう語」とする。他方、荻生徂徠『譯文笠蹄』には、蕪を「アルルトヨメドモ、草ノハヘシゲルヲ主トスル字ナリ。故ニ荒蕪・蕪穢ノ時ハアルルナリ。……青蕪・綠蕪・春蕪ナドト詩ニ使フハ、草ノハヘシゲレルヲ指テ云マデ

ニテ、荒廢ノ義ハナキナリ」とし、『和漢朗詠集和談鈔（詩注）』も綠蕪を「盛草白」とする。確かに「綠蕪」の語自體は、必ずしも荒廢の意を内在させてはいないが、ただ白居易「司馬宅」（卷10）の「雨徑綠蕪合、霜園紅葉多」のように、一般に手入れの行き届かぬ描寫に用いられがちであり、本詩の場合は荒廢感を伴なうと考えてよいだろう。

○「秦苑」 苑は『説文』卷一下に「禽獸を養ふ所以なり」とあり、古くは園、漢代以後、苑と呼び、苑圍・園苑と熟する。通常、天子や貴族の大規模な園林を指す。加藤繁『支那經濟史考證』<sup>(35)</sup>上卷の第四章にいう、「蓋し苑の原義は鳥獸を養ふ場所であつたであらうが、一轉して山林池沼のほとりに鳥獸を養ひ、其の間に宮殿亭榭を建て、以つて狩獵を行ふべく、以つて逍遙遊息すべき場所をも苑と呼ぶに至つたであらう」（六四頁）と。秦漢時代の苑圍は、規模が廣大で、珍禽や異獸を飼育して觀賞するとともに、離宮や別館も多く造られ、美しい樹木や花草、湖や池が彩りを添えた。張驥「古代長安的園苑」『文博』一九八六年第二期参照。川口注に「秦の始皇帝の作った咸陽宮の苑」（大曾根注も同じ）とあるが、遊樂や狩獵の行われた秦漢時代の廣大な御苑を想定すべきである。清の王堯衢「古唐詩合解」卷下は、秦漢の宮苑

を代表する上林苑を指すとす。前掲の『支那經濟史考證』にいう、

上林苑は舊と秦の苑で、秦が亡びてから廢れて居たのを、武帝の時更に改造し擴張したものであつて、東南の方、藍田縣から起り、南山に沿うて西の方整屋縣に及び、北は槐里縣なる黃山を包み、渭水に沿うて東に向ひ、其の周圍三百餘里に亘り、苑中の宮殿七十餘所、山もあれば川もあり、池沼森林もあり、無數の禽獸を養つて、秋冬に天子は臣僚を率ゐて射獵を行ひ、又群臣や遠方から獻じた名果異卉が三千餘種も其の中に栽培されて居た。

と。まさに離宮・遊園・狩獵場・動物園・植物園等を兼ねそなえた、七〇八縣にわたる廣大な區域であり、その中で採れる物産は、帝室の重要な収入源の一つになったという。

○「寂」 『許用晦文集』を始めとして、中國側のテキストはみな「夕」に作り、『私注』『抄注』などは「寂」、『六注』『和漢朗詠集和談鈔（詩注）』などは「靜」に作る。「夕」字は本詩の第三句「溪雲初起日沈閣」と呼應した表現であり、これが許渾の原形なのであろう。わびしい悲秋の黄昏時の情景を描寫して、懐古の情をつのらせるわけである。他方、「夕」と「寂」は日本漢字音が同一であることに基く改

(40) 變、「寂」と「靜」は和訓「しづかなり」を共通する同訓異字による改變である。つまり、夕↓寂↓靜へと改變されたのであろう。

○〔蟬〕 秋に鳴く寒蟬かんぜん（ひぐらし・つくつく法師の類）をいう。『禮記』月令篇、孟秋（七月）の條に、「涼風至、白露降、寒蟬鳴」とある。中國古典詩では一般に秋の蟬が歌われ、その清んでせわしげな鳴き聲が秋の寂寥感を深める<sup>(41)</sup>。

○〔紅葉〕 「紅葉」とともに、「もみぢ」を意味する詩語。一種の華やきをもつ「紅葉」と較べて、「紅葉」のほうは素朴で、うらぶれた寂寥感がただよう。小島憲之『國風暗黒時代の文學 中(下)』によれば、六朝詩から初盛唐詩にあつては、紅葉の字が大半を占めるが、中唐以降、逆轉して紅葉の字が多くなり、特に白居易は紅葉の字を多用する<sup>(42)</sup>。と。梁の何遜「日夕望江、贈魚司馬」詩に「仲秋黃葉下、長風正騷屑」、初唐の王勃「山中」詩に「況屬高風晚、山山黃葉飛」などと用いられる。

○〔漢宮〕 咸陽縣城の東南、渭水をへだてた漢の都長安の宮殿。清の殷元勳・宋邦綏『才調集補註』卷三は、「長樂宮・未央宮・建章宮・桂宮・北宮・甘泉宮、『三輔黃圖』に詳かなり」と注するが、前漢の長安城は城内の長樂宮・未央

宮と城外の建章宮の、三大宮殿群から成りたち、人口は三〇萬とも五〇萬ともいわれる。詳しくは、武伯綸『西安歷史述略』<sup>(43)</sup>「第五章 漢長安」、王仲殊『漢代考古學概説』<sup>(44)</sup>「長安・洛陽物語」三四頁以下参照。ちなみに、漢代の長安城址（西安市の西北約五キロ）は、唐代の長安城の北部、渭水の南岸の間に設けられた廣大な「禁苑」<sup>(45)</sup>内にあり、その位置は咸陽城により近い。

なお、この頸聯は、いわゆる互文見義（上下の文・句の中で一方で述べたことは他方で省き、雙方であい補うようにした表現技法）として解釋してよい。つまり秦苑・漢宮は、壯麗・豪華をきわめた秦漢の宮殿と苑囿を指し、それが今や荒廢して鳥遊び蟬鳴く廢墟と化したことをいう。清の宋宗元は「荒涼繪のごとし」<sup>(46)</sup>と評する。程千帆・沈祖芬選注『古詩今選』は、夕は朝と對し、秋は春と對して、いずれも荒涼を描き出し、實際の時節を指すとは限らない」と指摘するが、蟬や紅葉との關係で、文字どおり秋の夕暮と捉えてよいだろう。元稹の「種竹」詩に「鳴蟬 暮景に聒すし」とも歌う。

○野口寧齋『三體詩評釋』によれば、頸聯は中唐の韓翃「同題仙遊觀」詩の「山色遙連秦樹晚、砧聲近報漢宮秋（山色遙かに連なる 秦樹の晚れ、砧聲近く報ず 漢宮の秋）を踏まえ



るといふ。また韋莊「咸陽懷古」詩にも、秦苑と漢宮を對して、「山色不知秦苑廢、水聲空傍漢宮流」とある。

## 〔注〕

- (1) 『千載佳句』四時部・夏興に據る。ただし、金子彦二郎校本には「涯」を「渡」に作る。なお、長余縣の名は平岡・市原『唐代の行政地理』の索引に見えない。
- (2) 枋尾武著（臨川書店、一九九三年）に據る。
- (3) 李之勤・閻守誠・胡戟『蜀道話古』（西北大學出版社、一九八六年）二七頁には、故道の名の由來を「可能與它沿嘉陵江的東源故道水河谷而行有關。河谷中還有從秦代就設置的一個與之同名的縣級行政單位的治所」といふ。故道は散關道・青泥道ともいふ。馮漢鏞「唐五代時劍南道的交通路考」（『文史』十四輯、一九八二年）も參照。
- (4) 河池縣は、南へは蜀の成都へ、東北へは都長安へ、西北へは秦州へと通じる交通の要衝。
- (5) 元稹「青雲驛」詩に「昔遊蜀門下、有驛名青泥」や、『舊唐書』卷一六九、李訓傳參照。
- (6) 長舉縣が長安縣（都長安の郭下縣、京兆府）に誤った理由の一つは、おそらく同名異地の、より有名な青泥驛の存在と關係しよう。この青泥驛は、都長安と南の江淮の地を結ぶ交通幹線、いわゆる藍田・武關驛道（商山路）上に置かれてい

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂代（植木）

た。詩題の青泥店を當地の邸店と捉えた場合、地理上から長舉縣を長安縣の誤りと考えるケースが生じよう。なお筆者が『全唐詩逸』の詩題を採らなかつたのは、「西涯山口」の部分が未詳なためである。嚴耕望も全く言及しない。おそらく訛誤が存在するのであろう。また「私注」等の「青滋（濞）店」は青泥店の誤りであらう。

(7) 注3に引く『蜀道話古』三〇頁參照。

(8) 嚴耕望『唐代交通圖考』第三卷八三八頁等參照。ちなみに、鄭嶠「津陽門詩」（『全唐詩』卷五六七）には、玄宗の入蜀ルートを「青泥坂上到三蜀」と歌う。これは復路と往路を混同した誤りであらう。

(9) 北宋の『新定九域志』卷八、興州の條にも、「青泥嶺、山頂常有烟雲霰雪、……其山嶺上、入蜀之路」とある（王文楚・魏嵩山點校『元豐九域志』中華書局、一九八四年所收）。

(10) 青泥の語は、杜甫の「泥功山」詩（『詳註』卷八）に、「朝行青泥上、暮在青泥中。泥濘非一時、版築勞人功」云々とあり、この泥功山（泥公山）を青泥嶺の別稱と見なす説もある（『讀史方輿紀要』卷五六、陝西漢中府略陽縣や、『大清一統志（嘉慶重修）』統志）『秦州直隸州など』。しかし、この點については、嚴耕望『唐代交通圖考』第三卷八三四頁に、「但（杜甫詩）題曰泥功山、又編次秦州至同谷道上、故仍當是行至同谷以西之泥功山而作、非同谷以東百里之青泥嶺也。蓋兩處地貌相同、故詩句有「青泥」云々耳」とする説のほうが妥

當であらう。

- (11) 杜甫「白沙渡」詩(『詳註』卷九)に、「畏途隨長江、渡口下絕岸」とある。長江は嘉陵江(西漢水)。嚴耕望『唐代交通圖考』第三卷七七頁參照。
- (12) 日野開三郎『唐代邸店の研究』(自家版、一九六八年)や、滋賀秀三『譯注日本律令五』(東京堂出版、一九七九年)二〇一頁參照。
- (13) 日野開三郎『續唐代邸店の研究』(自家版、一九七〇年)第六章Ⅱ(二五一頁以下)參照。
- (14) 同『唐代詩人叢考』中華書局、一九八〇年所收。
- (15) 『唐代文學研究』廣西師範大學出版社、一九九〇年所收。
- (16) 『抄注』にもイ本の作者名を「李?」とする。伊藤・黒田編著『和漢朗詠集古注釋集成』第三卷には「謁」とするが、おそらく端の誤りであらう。
- (17) 劉初棠『盧綸詩集校注』(上海古籍出版社、一九八九年)も、傳説に従う。
- (18) 傅璇琮「李端考」(同『唐代詩人叢考』所收)は、「盧綸『送李校書赴東川幕』詩、乃是送李端、『巫山高』詩當是李端途經時所作」とするが、「巫山高」以下の發言は、おそらく誤りであらう。少くとも赴任途中の作ではあるまい。
- (19) 王勃「春日還郊」詩に「魚牀侵岸水、鳥路入山煙」とあり、聶文郁『王勃詩解』(青海人民出版社、一九八〇年)には、後句を「一條鳥纒可以飛過的路、隱沒在山的烟雲裏」と譯す。
- (20) 古い用例としては、北周の王褒「贈周處士」詩に「鳥道無蹊徑、清溪有波瀾」とある。
- (21) 李端「送路司諫侍從叔赴洪州」詩。
- (22) 張滌華主編『全唐詩大辭典』第一卷(山西人民出版社、一九九二年)七七六頁。
- (23) 初唐の駱賓王「從軍中行路難」詩に「途危紫蓋峯、路澀青泥坂」とある。清の陳熙晉『駱臨海集箋注』卷四は、この青泥坂を長學縣の青泥嶺を指すとし、二句を「言其途路危逾紫蓋之峯、澀甚青泥之坂也」と説明する。柿村『考證』には、ただあっさり「峯々の山路には梅雨を含み」と譯す。
- (24) 初唐の許敬宗撰?『朋友書儀』(趙和平『敦煌寫本書儀研究』所收)「五月仲夏」の注に「夏中・暑熱・甚熱・暑雨・溽暑・麥秋」とあり、皆川淇園『實字解』時令部・秋の條にも「五月を麥秋と稱す」とするが、従わない。
- (25) ほぼ同じ文が、唐末・五代の韓鄂撰『歲華紀麗』卷二、四月の條にも見える。
- (26) 趙和平『敦煌寫本書儀研究』(新文豐出版公司、一九九三年)所收。
- (27) 宮は行字であらう。
- (28) 羅宗濤「唐人題壁詩初探」(『中華文史論叢』四七輯、一九九一年)や、吳承學「論題壁詩——兼及相關的詩歌制作與傳播形式」(『文學遺產』一九九四年四期)など參照。

- (29) 吳鎮烽『陝西地理沿革』(陝西人民出版社、一九八一年)「第三章 城治要地」(五六九頁)参照。
- (30) 陝西人民出版社、一九八五年。
- (31) 集英社、一九八七年。
- (32) 従って大中五年、作者が監察御史をやめて京口(潤州)へ東歸しようとしていた秋末冬の作とする王驥「試測『山雨欲來風滿樓』詩句的寓意」(『南京師院學報(社會科學)』一九八二年一期)の説は誤りである。
- (33) 平凡社、一九八四年。
- (34) 清の宋翔鳳『小爾雅訓纂』廣言二に「莽・蕪は草なり」とある。
- (35) 東洋文庫、一九五二年。
- (36) 「漢代に於ける國家財政と帝室財政との區別並に帝室財政一斑」
- (37) 馬正林『豐鎬—長安—西安』(陝西人民出版社、一九七八年)第五章も参照。
- (38) 『千載佳句』四時部・早秋(松平文庫本影印)も「寂」に作る。ただし、金子彦二郎校本には「夕」に作る。
- (39) 野口寧齋『三體詩評釋』(郁文社、一九一〇年)に、「夕字は三句より出で、秋字は四句より出で、倍々悽涼を覺ゆ」とある。
- (40) 三木雅博『和漢朗詠集』平安古寫本の佳句本文の改變をめぐって—〈朗詠〉のもたらしたもの—(京都大學文學部『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)
- 『國語國文』五五卷四號、一九八六年)には、夕↓寂を「字音を契機として行なわれた本文の改變」の一例と見なす。
- (41) たとえば、「古詩十九首」其七「秋蟬鳴樹間、玄鳥逝安適」、曹植「贈白馬王彪」(「秋風發微涼、寒蟬鳴我側」など。
- (42) 塙書房、一九八五年、二〇三八頁以下参照。『六注』は「黃葉トハ、紅葉也」とし、『和漢朗詠集和談鈔(詩注)』も「黃葉者、漸ニ紅葉シタル白也」とする。
- (43) 陝西人民出版社、一九七九年。
- (44) 中華書局、一九八四年。
- (45) 清の徐松『唐兩京城坊考』卷一に、「禁苑者、隋之大興苑也。東距澗、北枕渭、西包漢長安城、南接都城。東西二十七里、南北二十三里、周一百二十里」とある。
- (46) 孫琴安『唐七律詩精華』(上海社會科學出版社、一九八九年)所引『網師園唐詩箋』。